



あ い さ つ

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会
会長 細野 泰也

このたび、茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会の広報誌が、本会広報研修部の先生方のご協力によって、発刊できますことに心より感謝申し上げますとともに、敬意を表したく存じます。

中央教育審議会の答申でも、“生きる力”を育成することが基本であるという視点に立って、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」と大きく叫ばれています。

学校教育でも、急激な国際化の進展に対応して、日本の歴史や文化・伝統への誇りや愛情と理解を培う教育が重視され、それを基盤とした広い視野をもって、異文化をもった人々と偏見をもたずに交流し、共に生きるための資質や能力の育成が急務であろうと思えます。

これからは、「総合的な学習の時間」や特別活動等の時間において、国際理解の一環として、小学生が外国語に触れたり、外国の生活や文化に慣れ親しんだりする体験的な学習活動が行われていくと考えられています。

このような状況の中で、本会では、本県から各赴任国へ派遣され、今年帰国された先生方及び現在派遣されている先生方の情報や生の声を会報に報告いただき、会員 158 名の力の結集を図り、新しい各国の情報を得ると同時に、会員の交流とともに、本県の国際理解教育の資料としての一助になれば幸いと考えています。

これからの 21 世紀を迎えるにあたり、日本が現在以上に様々な面で国際競争力をつけ、世界のリーダーとしての役割を果たしていくためには、児童・生徒の真の国際理解教育の重要性を、我々会員から全県に発信できるよう、会員一人一人が自覚をもつことが急務といえます。そのためにも、この会報が貴重な資料として活用できるよう創意を工夫して欲しいものです。

最後になりますが、多くの生の情報を提供してくださいました会員の皆様に深く感謝申し上げますとともに、これを機会に県下の会員の先生方そして海外の先生方が、お互いの交流・交歓の中から、それぞれもてる識見と情熱で明日からの教育活動の充実を願いつつ、あいさつといたします。

本年度帰国された先生方からのご便り

茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会の益々の隆盛を願って

岩間第二小学校・嶋田 徹

(H8年4月～H11年3月、シンガポール日本人学校小学部へ)

● ‘国際理解教育の推進について’ ー日本人学校が行う具体的施策ー

▽交換ホームステイプログラム

20人の5年生児童が、シンガポールにある小学校の1つであるテマセク校児童宅での1泊2日のホームステイとテマセク校での授業参加。また、その反対に、テマ

セク校5年生児童が、日本人学校5年生児童宅でのホームスティと日本人学校での授業参加。

▽国際水泳大会

- ・シンガポールにある国際校15校の500人が参加（小4～小6の児童）
- ・日本人学校の国際貢献とも言えるイベント

▽その他

- ・福祉委員会のボランティア活動（中古文房具の収集と寄贈）
- ・バトン部、縄跳び部、ダンス部、一輪車部、演劇部の現地行事での発表
- ・シンガポール体験クラブ現地探検
- ・サッカー部の国際校サッカー大会への参加

● ‘調和と均衡のために、シンガポール政府が行っていること’

▽各民族の宗教に根ざして、4回の正月を設けていること

1月1日の正月 (New Year's Day)

中国正月 (Chinese New Year)

マレー正月 (Hari Raya Puasa)

ヒンズー教の正月

(Deepavali Day)

▽コミュニティセンターの設置

いろいろな人種（中国系77%、マレー系14%、インド系7%、その他2%）

間の融和を考えて、コミュニティセンターは設置されているとのこと。

※ 現在、シンガポールには、約200のコミュニティセンターがあります。

※ 私は、1年目、近くのコミュニティセンターで、中華料理の調理法を習いましたが、食材費が高かったことと、先生のしていることを見ている時間が長かったことが、印象に残っています。（先生の作った物を試食できる機会は多く、おかげで、舌は肥えました。）

▽二言語政策をとっている

・二言語政策～皆が英語と母国語の二言語を話せるようにする政策

・二言語政策の結果、多くの人が2つ・3つの言語を、当然のように使い分けることができるようになっていく。例えば、マレー人が集まり、マレー語でにぎやかに話している時、中国人やインド人が現れ、会話に加わるという場面を見たことがある。その時、マレー人同士が続けて話している時は、マレー語が使われていたが、隣にいる中国人やインド人に話す時になると、自然と英語に変わるのである。

※ 意志疎通の円滑化～民族間の融和

私の最長の1学期

関城東小学校 飯塚敏夫

私たち家族5人は、平成8年4月6日、タイのドムアン国際空港に到着しました。妻は、1歳になったばかりの長女を胸に抱き、6歳の長男と4歳の二男を迷子にならないようにとしっかりと2人の手を引いていました。私は家族5人分の荷物をカートに乗せ、家族が同僚たちのグループからはぐれないようついていくのに精一杯の状態でした。

そんな私たちを先輩の先生方は、本当に温かく迎えてくれました。どこの日本人学校でもそのようにしてくれているのですが、不安だったことのほとんどが吹き飛んでしまいました。しかし、たった一つだけ本当に私を驚かせたことがありました。それは、小学5年生の担任は、6月のファヒンの臨海学校で子どもといっしょに1000メートル海を泳がなくてはならないということを聞かされたことです。学生時代に25メートル以上泳いだことのない私にとっては本当にショックなことでした。「子どもといっしょに泳ぐはずの教師が溺れるかも」そんな情けない状態が容易に想像できてしまうのです。

小中合わせて1800名を越える児童そして100名近い教師の数に驚きながらも、赴任1年目の5年3組担任がスタートしました。幸い学級の子どもたちは明るく素直で協力的で、学年の先生方の人間関係もとてもうまくいっていました。学年はじめの事務処理に追われながらも、もう1人の泳ぎの苦手な先生といっしょに放課後特訓を開始しました。本当に毎日毎日練習しました。休みの日は自分のマンションのプールで少なくとも1時間は泳ぎました。毎日くたくたになって帰ってくるので、妻の話を聞いてあげる機会も少なく、末娘の面倒を見るでもなく本当に迷惑をかけたと感じています。練習のかがあって、臨海学校では、無事泳ぎ切ることができ、子どもたちと最高の思い出を作ることができました。

臨海学校が終わる6月末頃には、タイの暑さ、食べ物の辛さ、世界一の交通渋滞にも少しずつ慣れてきました。タイ語も少しずつ話せるようになり、レストランで自分がオーダーした食べ物がきちんと間違えないで出てくるようにもなりました。この赴任した1学期間は本当に長く感じられ、日本にいた5年分にも相当するものでした。この3年間で体験したことを生かして少しぐらいのことではくじけず、がんばっていきたいと思います。

マナオスでの教育実践

中 島 淳 夫

平成8年度に、マナオス日本人学校で小学部1,2年生を担当させていただいたことは、大変勉強になりました。それまで日本で小学1年生を担当したり、生活科や国語科の学習で複式の指導する経験はありませんでした。児童達は、明るく元気でエネルギーに溢れており、毎日の学習や生活が楽しかったです。第1学年5名、第2学年3名の複式学級の学級担任として、クラス全部で8名という少人数のメリットを生かし、随時細かく個別指導をするように心がけました。家庭との連絡を密にするために、ほぼ毎日学級通信を発行し、学校の行事や学習、生活の様子を家庭に伝えました。また、家庭の様子や意見などを書く欄を設け、家庭での児童の様子などを保護者に自由に書いていただき、児童理解や、各家庭の要望等を知る一助としました。保護者との連絡には、他に連絡帳を用い、常に意思の疎通が図れるようにしました。現在、私は中学校に勤務しており、第2学年の担任をしていますが、時間的精神的な余裕は、当時と比べようがありません。今思えば、その時は、大変ゆったりと教育実践に取り組むことができていました。

学習指導では、児童の発想を大切に学習を心がけました。国語科の物語文の読解では、自分たちで学習問題を作る学習を取り入れ、主体的な学習ができるようにしました。また、作文や日記、音読にも力を入れて指導してきました。生活科では、学校の近くのロード地区の商店街を見学し、実際に買い物を体験する学習を計画、実践しました。その際に職員で下見を十分に行い、治安上の問題がないように配慮しました。この学習は、児童のものの見方や考え方、感じ方を深めたり、広げたりすることに有効だったと思います。買い物を体験した児童たちの生き生きした表情はいまだに忘れられません。

一番の思い出は、マナオスならではの行事「アマゾン体験学習」を担当したことです。アマゾン川岸の砂浜で、宿泊体験活動をしました。家作りや食事作り等の取り組みを通して、集団規律を守り行動する態度や自主的に行動する態度、協力する態度を身につけること等をねらいとし、成果が上がりました。日本にいたら、アマゾン川の河畔でキャンプをするなんて、ピラニアや大蛇に食べられてしまうのではないかと心配しそうですが、そんなことはないのです。

マナオスでの経験は、ジャングルツアーに行った時、見上げた夜空の南十字星やケンタウルス座のように、私の中でとてもきれいに輝いています。

ペナン日本人学校に勤務して

大洗町立南中学校教諭 山本 一典

1 ペナン日本人学校の特徴

(1) 学校の概要

ペナン日本人学校は、児童・生徒数約150人、教職員数22名（派遣教員15名）の小中併設校である。平成8年度には児童・生徒数は200名ほど在籍していたが、年々減少してきている。特徴ある授業としては、全学年英語の授業が週2時間の実施や全学年体育において水泳の授業が週1回行われている。また、比較的治安の良いところなので、校外学習も学習課題にそって実施できている。学校行事では、遠足・運動会・ペスタブンガラヤ（学園祭）・水泳記録会・宿泊学習・修学旅行のほかに、現地校（サムサ校・ダラット校）との交流会や民族音楽鑑賞会なども行われている。

(2) 国際理解教育の推進

- ア. 現地校及びインターナショナルスクールとの交流の推進
- イ. 社会科見学を通しての現地理解
- ウ. 中学部社会科資料集をホームページに掲載（[http:// www. mypjs. com](http://www.mypjs.com)）

2 3年間を振り返って

この3年間、担任として小学部を受け持ち、授業では中学部の教科を担当するなど、ペナン日本人学校の「小学校と中学校の交流（教員も同様）が多く、仲がよい」という良さを生かした実践をするなど、貴重な経験を積ませていただいた。

3年間を振り返って、現地理解は人を好きになることから始まるのだということを実感している。人を理解し、その国を理解することをペナンに住む現地の人々から教わったような気がする。帰国後も人との関わりが継続してできる国際理解教育を目指していきたい。また、ほんのわずかな経験の積み重ねにすぎないが、1つだけ認識を新たにしたものがある。それは、マレーシアに住んでいる人の温かさである。人と人、家族との結びつきが強いマレーシアに住んで、日本で失いかけている心の豊かさをしみじみと感じた。

補習授業校の現状と課題

—デトロイト補習授業校での実践を通して—

水戸市立第三中学校 上宮 正人

1. 補習授業校とは

補習授業校に在籍する子ども達は、月曜日から金曜日まで現地の学校へ通い、英語で現地の教育を受けています。外国人が多く住んでいる地域では、E.S.L.教室が設置されているところもありますが、これはごく限られた話で、日本から来たばかりの子ども達は、そのほとんどが家庭教師を付けて英語に苦しみながら勉強をしているのが現状です。その現地校が休みになる土曜日や日曜日（平日の放課後に開校している所もある）を使い、日本語による日本の教育課程を補習する機会を与えているのが補習授業校なのです。世界には180校以上の補習授業校があり、日本人学校の在籍者数とほぼ同数の約1万7千人の子ども達に通っています。学部は幼稚園から高等部（補習授業校により異なる）まであり、週に1回か2回（年間でも45日程度）日本語で勉強するために集まってくる学校なのです。

2. 派遣教員の仕事（デトロイト補習授業校での実践から）

学校の運営は、理事会、運営委員会を中心に、派遣教員3名と事務長、事務員で行っています。そして、土曜日に子ども達を直接指導しているのが約60名の現地採用講師の先生方です。派遣教員の最大の使命は、この現地採用講師の先生方の資質と教育技術の向上を図ることと言えます。しかし、現地採用講師の先生方は、その多くが平日他の仕事を持っていたり、大学院生であったりするため、直接会えるのは授業日だけでした。

そこで、電話やファックス、Eメール等を使って情報交換や支援を行っていました。

平日の仕事の主なものを紹介しますと①授業日の反省 ②教務部打ち合わせ ③学校行事の企画立案 ④研修計画の企画・実践 ⑤年間指導計画の立案支援 ⑥教材研究・教材開発の支援 ⑦学校だより「ごだいこ」の作成 ⑧転出入生の手続き・学籍管理 ⑨副教頭先生との打ち合わせ ⑩進路指導及び教育相談（教育相談室との連携）などが挙げられます。

3. 保護者の願い

補習授業校へ通う子ども達のほとんどは帰国を予定しています。そのため、保護者が補習授業校へ望むことは、まさに日本の学校そのものだと言えます。例えば、①帰国後の学校で他の子に付いていける学力を身に付ける ②国語や算数（数学）だけでなく、理科、社会、音楽、体育も教える ③教科書は精選せずに全て教える ④日本式の学校生活を体験させる ⑤日本の学校行事を体験させる ⑥日本の文化、習慣、作法を学ばせるなどです。

4. 子ども達の実態

日本から来たばかりの子ども達は、英語が理解できない・話せないために本当に大変な思いをしています。そんな子ども達にとっての補習授業校は、現地校で溜まったストレスを発散できる心のオアシスなのかもしれません。逆に、保護者の滞米年数の長期化や渡米時の低年齢化等により、日本語が第一言語となっていない子ども達もいます。この子たちにとって補習授業校はストレスを溜めてしまうところなのかもしれません。

これは両極端かもしれませんが、そんな様々な背景の子ども達が集まってくるのが補習授業校なのです。

5. 今後の課題

まずは、補習授業校は日本の学校とは同じになれないことを保護者も教師も自覚することが必要です。その上で、様々な背景を抱えた子ども達に対し、限られた時間の中で日本語で日本の教育課程を補習するためには、①教科書の内容をどう厳選（削除）するか ②日本語を第一言語としない、またはそれに近い子ども達を対象とした教材の開発など日本側からの支援体制を整えていく必要があると思われます。

サン・ホセ日本人学校

取手市立寺原小学校教諭 豊嶋 俊彦

北緯九度五十七分。夏にはほとんど真上から照りつける太陽を浴びて、日本人学校のフルーツはたわわに実り、校庭の芝生にその影を落としています。カリブを越えて二千七百米のポアス火山から吹いてくる乾いた風は、学校を取り巻くブーゲンビリヤを揺らし、子ども達の頬を撫でていきます。

休み時間にはマンゴーの木にぶら下がり、5月の青い実に塩をつけて食べる子どもたち。その実は夏休み前に黄色く熟し、好き勝手にもぎっては、皆その豊熟な味を楽しみます。また、十一月ごろのみずみずしいオレンジの味、幹ごとぱっさり切り取って収穫するバナナなど、学校のフルーツで歳時記が書けるほど豊富に一年中実ります。

小学部一年から中学部三年までわずか三十人の子どもたちは、そんな豊かな自然の色彩のようからっと明るく、のびのびとしています。

このような小さな学校では、自ずと縦割りの活動が多いため、上級生と下級生の関係は兄弟のようで、教師がとやかく言わなくともうまくいきます。また、各担任は児童・生徒との一対一の関係を築きやすく、家庭との連携もスムーズです。そういった環境が、のびのびとした子ども達を育てていると言えます。

この日本人学校の邦人社会における位置を再認識する機会がありました。というのも、日本人会費の多くを学校運営に割きながら、実際に学校に直接関係する人は少ないという

二律背反の実情が危惧されはじめたからです。そこで、学校の新しい存在価値を築こうと、職員で考えた計画がEPT（エスクエラ・パラ・トドス＝みんなの学校）プロジェクトです。これには一、学校を知ってもらおう。二、学校に親しんでもらおう。三、日本人の輪を広げてもらう。の三本の柱を立てました。一の柱のメインには広報紙の発行を掲げ、学校便りとは違った角度から学校や日本人会の活動を情宣しました。二の柱には土曜日の学校開放や、毎日のビデオ、図書貸し出しを常時活動とし、三の柱にはEPT主催のソフトボール大会など、行事を中心に置きました。活動費は広報紙の広告料で賄い、レクリエーション感覚で取り組めたことが定着につながったのだと思います。

関東ブロック東京大会で発表された先生の実稿

第10回関東ブロック東京大会での発表を通して

龍ヶ崎市立城南中学校 名越 和美

1 はじめに

夏休みも終盤の8月25日、第10回海外子女教育・国際理解教育研究会関東ブロック（東京）研究大会が目白学園女子短期大学を会場に開催された。大会では、「世界に目をひらき、心をひらく子どもの育成」をテーマに、21世紀に生きる子どもたちに今求められている資質、人間づくりの基盤としての国際理解教育のあり方を探るために、基調提案や記念講演が行われ、5つの分科会を通じて実践や研究の発表がなされた。

2 分科会での発表「ブラジルの学校と生活習慣について」

① 茨城県の実態と取り組み

始めに本県が平成10年度に開催した「帰国・外国人児童生徒教育研究協議会」の概要を説明した。本県では外国人児童生徒1445人、そのうち日本語指導必要児童生徒638人がおり、国及び地域も41ヶ国、母国語も33言語に及んでいる。

それらの児童生徒に対しての支援と担当職員の研修の場として、研究協議会が年3回設けられている。そこでは、各学校における日本語指導の実践を持ち寄り、課題やその改善策を話し合ってきた。

② ブラジルの学校と生活習慣について

平成7年4月より3年間、ブラジル国サンパウロ日本人学校で勤務した経験をもとに、ブラジルの教育制度と生活習慣の特色について現地でのエピソードを交えながら発表を行った。

ブラジルから来日する子どもの数は年々増加している。現地ではどのような教育を受けているのか。教育制度やその問題点などの具体例を挙げてみた。地理的にも日本とブラジルは地球の正反対に位置しているが、特に生活習慣については180度違った発想で暮らすことで、心にゆとりがもてた体験等を述べた。外国人教育で大切なことは、日本の価値で判断するのではなく、その国の生活習慣などを十分に踏まえ、より個に応じた指導をしていくことである。

③ 龍ヶ崎市立城南中学校の外国人教育

本校ではブラジル国籍者1名が在籍している。本人、保護者とも日本の高校へ進学を希望している。そこで、国語と数学を取り出しによる個別学習を行ってきた。他の教科は指導者が授業時間内で配慮するようにした。

導者間の連絡のため記録ノートを作り、学習進度や生徒の様子などを記録したが、つまづきを探ることや効果的な学習を行う上で役立った。学習教材では、県発行による「日本語の初期指導、算数指導」が現地語と照らし合わせた内容で構成されていたので、生徒も興味・関心を持ち学習に取り組むことができた。

年度末の話し合いでは、学習レベルに応じた指導法、国語・数学以外の教科での配慮の工夫、指導者間の意見交換、親学級へ戻すタイミングなどが反省としてあげられた。

④ 今後の課題

滞在理由や日本語能力の有無に関わらず、子供たちに対しては教育の機会を平等に与え、彼らの能力が開花するように援助することが学校教育に課せられた課題である。そのために、教育を受けさせていく上で障害となる語学力の不足を補う指導や生活の順調な適応を支援する活動は必要不可欠である。

具体的な内容としては、在籍校における受入体制や日本語指導体制の整備、生徒・教職員の意識の向上、指導カリキュラムや教材・教具の作成、外国人子女の母国語話者によるカウンセリング、保護者との連携、未就学外国人子女への対応、中学卒業後の進路などが考えられる。

3 おわりに

分科会の講師であった大阪大学山田先生から「仕方がないと諦めてしまうのではなく、仕方を考える発想の転換が必要である」と助言を頂いた。この研究会を通して最も印象に残った言葉であり、今後に生かしていきたい。

また、東京都での開催ということもあり、ほとんどが初顔合わせの方であったが、本県海外子女教育・国際理解教育研究会の会長である細野先生より、発表直前に頂いた励ましの言葉にはとても勇気づけられた。

在外教育施設に派遣されている先生方からのお便り

クイーンズランド日本語補習授業校の紹介

クイーンズランド日本語補習授業校 友部 政勝

補習授業校とは、在留国の学校やインターナショナルスクールなどに通学している児童生徒に対し、土曜日や放課後を利用して日本語による我が国の小学校又は中学校における教育の一部に準ずる教育を行うことを目的とする定時制の在外教育施設です。

クイーンズランド日本語補習授業校はオーストラリア第三の都市、ブリスベンと南半球を代表するリゾート地ゴールドコーストにあります。大洋州に11校ある補習校のうち、文部省派遣教員がいる唯一の補習校です。ブリスベンとゴールドコーストはその間がおおよそ90km離れています。ブリスベン、ゴールドコースト双方に学校事務所があり、火曜日・木曜日はブリスベンに、水曜日・金曜日はゴールドコーストに勤務しています。補習校の授業日である土曜日はブリスベン校、ゴールドコースト校に隔週ごとに通い、現地採用教員を指導しています。現地採用教員は、ブリスベン校に9名、ゴールドコースト校に10名おり、児童生徒と学習しています。日本での教員経験や日本の教員免許状を取得している教師が大多数を占め、それなりに優秀な人材が揃っています。教員希望者も多く、現在ウェーティングしている者が10数名います。

児童生徒数は、ブリスベン校（88名）、ゴールドコースト校（90名）、毎週土曜日に国語2時間、算数・数学2時間の勉強をしています。幼稚部から中学部3年生までが同じ校舎で学びふれあうことにより、学力だけでなく、自主性や思いやりの心を育てています。日本の伝統や文化を受け継ぐ21世紀の人づくりを目標に運営しています。

働き始めた「サウダイゼーション」

サウジアラビア王国リアド日本人学校 瀬尾 洋一

「失業率13%」と聞いて、どこの国を連想するだろうか。日本？韓国？フランス？それともアフリカかどこかの発展途上国だろうか。実はわたしが勤務するリアド日本人学校のあるサウジアラビアの実態である。サウジといえば日本人が思い浮かべるのは、石油砂漠、ラクダぐらいであろうか。特に石油はその豊富な埋蔵量で第二次世界大戦後急速に国の近代化を進めた原動力として知られている。その急激な発展は「18世紀から20世紀の世界へ」といわれるほどのものであった。実際、首都リヤドも小さなオアシスの町から、この30年で人口100万人をこえる大都市へと変化した。町には縦横に高速道路が

張り巡らされ、日本や欧米製の高級車が走り回る。

しかし今、この裕福なはずの国も財政難と失業に悩んでいると聞く。20世紀の石油文明は大気を汚し、地球を温め環境問題を生みだした。石油の消費量は年々減り続けている。石油の消費量の落ち込みが、石油によって国作りをしてきたサウジを苦しめているのだ。人々の生活が豊かになり、人口も爆発的に増え続けている。サウジでは19歳以下の人口比が60%もしめる。まさに、「大学は出たけれど・・・」である。

最近「サウダイゼーション」という言葉をよく耳にする。サウジでは、いわゆる単純労働は外国人労働者が受け持つ。ちょっと前までは、サウジ人が一般店舗でレジを打ったりすることはなかったことである。しかし今、スーパーマーケットで買い物をすると、トップ（サウジ人の男性用の民族衣装、頭にはスカーフを巻く）を着たサウジ人スタッフがレジを打つ姿を見かけるようになった。政府も外国企業に積極的にサウジ人スタッフを雇用するようという指示を出すようになってきている。

インターナショナルスクールにも同様の指示が出ていると聞く。アメリカンスクール、ブリティッシュスクール・・・日本人学校。（リヤドには沢山のインターナショナルスクールがある。）もしかしたら近い将来、我々もサウジ人スタッフとともに仕事をする日が来るかもしれない・・・。

カイロにきて思うこと

カイロ日本人学校 浅野光省

今年度4月よりカイロに赴任させていただきました。赴任前は、不安ばかりが先走り、どのような生活になるのか、見当もつきませんでした。いろいろと調べ始めてから、エジプトのことが分かってきたのですが、頭で分かっているつもりでも、実際住んでみると大分違うことに気がつきました。今では、なれたこともあってか、住み心地のよい土地に思っています。エジプトのよさがだんだん見えてきて、親日的で陽気なエジブシャンや見ただけで気持ちが大きくなるナイル川に囲まれて生活しています。カイロ特有の腹痛にも悩まされることなく、生活できているのは妻のおかげですし、ちょっとは無理して仕事をしていますが、学校で自分なりの仕事ができるのも、自分を取り巻く人たちのおかげだと感謝しております。この素晴らしい環境の中で教育活動ができる喜びは、日本では味わえないことと言えるでしょう。

さて、実際自分の目で見たカイロというと、名前から受ける印象とは違い、確かに建物は古いのですが、その中にも、新しい時代の流れが吹き込んできて、昔と現代が入り交じった不思議な感じを受けます。道路を走る車は、日本でいう20年くらい前の車がたくさん、立派に走っているし、でも、その中をよく見ると、高級車も混じっていたりします。また、車の駐車の仕事も合理的ではありますが、二重駐車は日常茶飯事です。市内は、全て一方通行。これもたくさんの車が通りやすいように工夫された一つのような気がします。私の住んでいるザマレック地区は、外国人が多く、広場や公園など国際色豊かで、日差しが強い中でも、木陰を選んで、スポーツしたりおしゃべりしたりする光景をよく見かけます。

学校へのアクセスは、ドライバーさんとの契約で、車での通勤です。朝、非常に早いので、奥さんが大変です。毎日のお弁当作りについては、頭が下がる思いです。通勤途中には、眺めのいいスポットがあり、車に乗りながら3大ピラミッドを臨むことができます。しかし、朝は霧が発生していることが多く、毎朝見ることはできません。ここカイロは教育環境としては、とても素晴らしい場所です。学校がピラミッドの近くというのも非常によい環境だと思いますし、霧が晴れば、雄大なピラミッドをすぐ眺めることができることもよい環境だと思います。ただ、気温が40度近くにもなることで、水筒は欠かすことのできない必需品の一つです。その中で、カイロ日本人学校の子供も達は、元気に登校し、仲良く楽しく勉強し、運動し、遊んでいます。全校児童生徒数は、43名で、現在私の担任している小学部1年生は5人です。9月より数名の転入が予定されているので、若干増えますが、毎日楽しく生活しています。時には、泣き、笑い、怒り、子ども達のパワーを

もらいながら、今年度頑張りたいと思っています。

今回の、執筆にあたっては、授業の研究（7月に構内授業研究という形で1回行いました）や学校の紹介をと思ったのですが、こちらにきて、まだ日が浅いということと、自分の研究が進んでいないということで、とりとめのない内容になってしまいましたが、雑感として、思うままに書かせていただきました。これが2年目、3年目となるとまた、違った形で書くことができるようになるのではないかと思います。

最後に、我が茨城県にも世界からの帰国子女がたくさんいます。その子たちが抱えている問題をみなさんの心にも留めていただきたいと思います。自分が今携わっている仕事はどういうものなのかを考えつつ、国際理解に貢献できるよう、日々努力したいと思います。

現地理解（交流活動）教育の研究実践

スラバヤ日本人学校（日立市立駒王中学校在籍） 宇佐美 毅

1. 研究主題

本校の児童生徒は、インドネシアのスラバヤに在住しており、日本国内では到底できない多様な体験を積むことができる。しかし、消極的な態度で場面に遭遇しているだけでは、それは何の意味も持ち得ない。自分を取り巻く環境に積極的にはたらきかけ、意欲的に交流活動や課題解決に取り組んでこそ本当の国際理解ができる。本校では、研究主題を「意欲的に国際理解に取り組む児童生徒の育成～現地校との交流活動を中心に～」と設定し、研究仮説を「現地校との交流活動を充実させていくことにより、児童生徒の自主性や協調性が育ち、意欲的に国際理解に取り組む生徒が育つであろう」とした。現地校との交流活動（「交流授業」）の充実・向上が、国際理解への原点であるという考えに立つものである。

2. 現地校を招待しての授業（～算数科を通して～小学部3年）

(1) 単元名 三角形（正三角形）で遊ぼう

(2) 本時のねらい

- ・ 図形の問題（パズル）を解決する課程において、現地校児童と協力して具体物の捜査活動を行ったり、相互にアイディアを交換したりするなど、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
- ・ 図形の性質や美しさを、体験的にとらえ理解させるとともに、角度や辺について、より深く追究していこうとする意欲を持たせる。

(3) 展開

* 現地校児童と2人組で活動する。

- ① パズルをしよう（正三角形にも正方形にもなる）「きれいな形を作ろう」と指示し、お互いに試行錯誤しながら組み合わせていく。（※具体例は省略させていただきました。）
- ② 正三角形折り紙をしよう（星形・チューリップ）
- ③ マッチ棒クイズをしよう。

3. これからの現地理解・国際理解

「国際性豊かな児童生徒の育成」それは、異文化を理解し共生していける力の育成であり、比較をする力、コミュニケーションの能力、自分の見方や考え方を的確に表現する力、さらに他者とのかわりを通して、自分の考え方、行動の仕方などを柔軟に変えることができる実践的態度の育成といえる。

これらの力を身につけ、協力して何かを解決したとか、達成できたとかいう成功感や成就感が得られるよう、より一層の直接的日常的交流活動の充実向上を図っていきたい。

「補習授業校雑感」

サンフランシスコ日本語補習校
石井 久雄（平成9年度派遣）

本校は、サンフランシスコのベイエリアに住む日本人及び日系の児童生徒 1200 名余りが通う、今年で創立 30 年を迎える補習授業校です。サンフランシスコ地区・シリコンバレーと呼ばれるサンノゼ地区に、それぞれ小学部・中高部の 4 校で運営をしています。年間の授業日数は土曜日を中心に 48 日間。小学 1～2 年生は、国語・算数を土曜日の午前中に、小学 3 年生以上は、国語・算数・理科・社会の 4 教科を土曜日一日で学習しています。児童達は、月曜日～金曜日まではアメリカの現地校に通い土曜日のみ本校に通ってきます。

私は、小学部サンフランシスコ校の担当教頭として 3 年目になります。学校では教頭と呼ばれますが、実際は「何でも屋」といった感じです。校舎を持っていないため土曜日の授業日のみ現地校の校舎を借りています。授業日には先生方から頼まれたプリント類や教材・教具類を用意し大量の荷物を車に積んで出勤です。まるで毎週引っ越しをしているような状態です。また、6 月の半ばから集中学習という 10 日間の連続した授業を行います。借用校舎が変わりまた引っ越しです。毎回重い荷物を運ぶためでしょうか、腰を痛めてしまいました。実際の仕事は多岐にわたりますが、授業日は一番に出勤し教室や校舎を点検、先生や児童を待ちます。授業中は、授業参観をしたり先生方と懇談したりといったところ。平日は、火曜日～金曜日まで事務所で勤務（日曜・月曜が休み）。主な仕事は、先生方の学級経営日誌を読んで返事を書いたり、悩み事・問題ごとへの助言をしたり。学校行事についての原案を作り起案の準備をするのも派遣教員の仕事。校務分掌はありますが、土曜日だけの採用の現地採用教員にはすべてをお願いできないのも現実。また、教育課程の編成や指導計画の作成も派遣教員の仕事になります。師範授業をすることもあります。こう考えると、日本の学校現場で教務主任から各教科主任がしている仕事をすべてこなさなければならず、時には苦情処理（保護者などから）、生徒指導の問題処理までと本当に幅広い仕事です。それ故補習校の派遣教員は「何でも屋」となり、どちらかという体力と神経の図太さで勝負しなければいけません。大変精神的・肉体的につらいものもありますが、当地で学ぶ児童達や日本の教員以上に熱心に指導される先生方と一緒に仕事ができるのは喜びであり、そんな子供達や先生方のために何かお役に立てればという気持ちで、霧の町サンフランシスコの生活を楽しみながらがんばっております。

Home page :www.comed.org/sfjc/ E-mail :sfjlc@msn.com

「インドとの接点」に注目した現地理解教育

ニューデリー日本人学校 飯島康之

インドのような日本とは違う厳しい自然環境や生活環境にすむ日本人には、社会や自然・文化との関わりや、インドの人たちとの交流といった「インドとの接点」が制限されてしまうという実状がある。そのために、「インドならでは体験ができない」、「もしできても、それがインドやインドの人たちに対する誤った見方につながってしまう」といった問題点が生じてしまうことがある。

そこで、ニューデリー日本人学校では、児童生徒が偏見やまちがった印象を持つことなく、自然なかたちでインドのよさに気がついていくように、教師が適切な配慮のもとに体験（インドとの接点、特にインド人との触れ合い）の場をできるだけ多く設定していくことを大切にしながら研究を続けている。

そのような観点から、本年度もたくさんの現地理解教育が実践されている。主なものは、
①インドの私立学校 BlueBell's School との交流（訪問と来校、行事への招待）
②ヒンディ語教室（年 3 回） ③英会話（週 2 時間） ④ヨガ教室（年 2 回） ⑤スポーツを通しての国際学校との交流（米・英・独・仏・露・印との水泳大会や球技大会）
⑥社会見学 ⑦クラフトメラ（インドの物産展）見学 ⑧日本文化・伝統の理解（七夕集会、夏祭り、餅つき大会、書き初め大会） ⑨修学旅行（昨年は世界遺産のアジャン

タ、エローラ)、宿泊学習、遠足 ⑩現地理解週間(現地理解、国際理解の強化週間として、掲示・展示をするとともに、昨年はインディアンダンス、サリー着付け、ターバン体験、ヘナ体験、インド料理試食、サル使い見学、ヘビ使い見学を実施)などである。また、年3回の現地理解教育研究授業が全教員の協力で行われ、児童生徒の現地理解を深めるとともに、現地理解教育のあり方やその方法についても着実に成果を上げている。私も、派遣2年目を迎え、インド生活にもすっかり慣れ、ますます児童生徒のために本当に役立つ実践をしたいと思っているこの頃です。

地域の特性を生かして

中華人民共和国 大連日本人学校 中菌 正秀

大連が初めて歴史の舞台に出てくるのは1894年に起こった日清戦争、それ以前はひなびた漁村だったと聞いています。以後日露戦争、日中戦争と戦略的に重要な拠点として位置づけられてきました。当時30万もの日本人が移住した大連。今でも旧日本人街や旧満鉄・旧横浜銀行などの建造物がたくさん残っていて、至る所に昔の日本の面影を見いだすことができます。そのため毎年多くの年輩の観光客が日本から訪れます。一方、現代の大連は経済開発区として成長が著しく、あちらこちらで高層ビルが建ち、私が赴任したときと現在とでも大きく変貌しており、その変化には目を見張るものがあります。

大連日本人学校は市内から少しはずれた黄海の見える高台にあり、海を見ながら授業ができるというとても環境に恵まれた場所にあります。幼小中合わせて90名ほどの子どもたちが通っており、少人数のメリットを生かした授業を行うことができます。学校の特色として特に現地理解教育に力を入れています。各学年の社会科見学、北京や瀋陽(奉天)への修学旅行や遠足、現地校との国際交流、週1時間の中国語の時間など中国の歴史や文化、生活習慣などを理解するなど、国際性豊かな日本人の育成をめざして取り組んでいます。子どもたちは特に年間4回の現地校との交流を楽しみにしており、おぼつかない中国語と身振り手振りを取り混ぜながらもうち解け合い、一緒に遊ぶ姿には国境はないと思うこともしばしばあります。又、昨年度は社会科見学で初めて旅順に行ってきました。旅順は大連市の一部とはいえ、まだ外国人に解放していない場所も多く、解放しているところも許可がなくては行けないのですが、日露戦争の史跡が近くにあるのに教科書だけでするのはもったいないと思い、小六と中二合同で見学に行きました。ロシア軍の防塁、203高地、軍港などを見て、なぜここが戦場になったのか考えました。このように地域の特色を生かした校外学習、交流学习、その他の行事を終えて、そのまとめや感想を見ると日本国内にいてはなかなか培うことのできない現地理解や国際理解が浸透している姿を伺うことができます。3年間という期間は本当に短いものですが、共に学び、その一助になったことをとても幸せに思っています。

バルセロナ日本人学校に赴任して(国事情及び雑感)

バルセロナ日本人学校 秋場 義明

バルセロナはスペイン第二の都市で、港町です。年間を通して晴れの日が多いバルセロナ。砂浜では5月頃から日光浴を楽しむ人たちがでにぎわいます。曇りや雨の日が多いヨーロッパ各国からの人々で7、8月は大いに混雑します。またこの季節は夜の9時過ぎまで太陽が出ています。ですから気がつく「もう10時」ということがよくあります。スペイン人は夜の9時、10時ごろから夕飯です。そして延々午前2時ごろまでゆっくり楽しめます。本当にタフな人たちです。こちらは完全な週休2日です。そして日本と大きく違うのは、日曜日は店は営業しないということです。ですから土曜日に買い物を済ませておかないと大変なことになります。日曜日でも営業しているのは、キオスク(新聞や簡単なパンなどを売っている)やハル(簡単な食事や、お酒を飲めるところ)中華料理店くらいです。物価についてですが、日本ほどは高くありませんが、「安い!」とも言えません。ものによります。果物、野菜、肉、魚介類は安いです。ビールやワイン、ウイスキー類はかなり安いです。高いものは住宅費です(悩みの種です)。交通運賃は安く、地下鉄やバ

スはどこまで乗っても100円しません。交通事情についてはこちらに来て一番ショックなものでした。日本とは逆の左ハンドル右側通行、そのうえ違法駐車、ウインカーなしの割り込みがあたりまえ。とても不安でした。子どもにとっても優しく、買い物の順番をきちんと守る紳士的なスペイン人。その一方でハンドルを握るとラテンの血がさわぐ荒々しさも持っていることが分かりました。

私が勤務しているバルセロナ日本人学校は生徒数113名（男子47名、女子66名）の、小中一緒の学校です。各学年1クラス。小学部は89名、中学部は24名です。中学部は1年生11名、2年生12名、3年生は1名です。私は中2の担任です。12名中男子は2名、女子は10名です。ですがそのうちすでに4人はいなくなることが決まっています。生徒たちは素直で前向きです。一番の課題は日本に帰国して適応できるたくましさ体力アップです。4:30にはバス下校。放課後にゆっくり話をしたり、部活で汗を流したりすることがないため、ストレスもたまり運動不足になっています。何とかできないものかと職員一同知恵を絞っています。

釜山日本人学校 笥伸之

○2002年に向け熱い釜山

コンテナ満載のタンカーが行き交う釜山港。新鮮な魚介類が並ぶチャガルチ市場。港の歴史とともに発展してきた海の町、釜山。

1988年のソウルオリンピック以降、ここ釜山も急速に近代化が進められてきた。最近では2002年のサッカーワールドカップ、釜山アジア競技大会の開催に向けて、地下鉄増設、草花の植栽など、美しい町づくりに力が注がれている。

古くから日本と密接な関係にある釜山。豊臣秀吉の進攻をくい止めた李朝時代の英雄、李舜臣の銅像を至るところで目にするが、かつて懸念された反日感情は特別な場合を除いては感じられず、ワールドカップ共同開催、日本大衆文化の開放政策を契機とした「未来志向の日韓関係づくり」が期待されている。

○体験的な学習を通して

1975年の開校以来「明るく・正しく・たくましく」を教育目標とし、「主体的に行動する児童生徒の育成」をテーマに体験的な学習を重視した教育課題を編成している。また、今年度からは、2002年に向けて、総合学習への試行の準備として「釜山」の時間を新設した。

○国際交流行事

インターナショナルスクール（IPS）にて開催されるバザー「メイ・フェア」への参加、IPS・民楽初等学校・本校による三校交流会、IPSとの「サッカー交流会」を柱として推進している。また、運動会では民楽初等学校の児童を招いて共に競技するほか、教員の交流も草の根的に進めている。

○社会科副読本「釜山」

児童が主体的に釜山について学習することができる「学び方主導型」の社会科副読本「釜山」が昨年度完成した。今年度は、この副読本を利用し、上下水処理場や焼却場などへ見学学習を行った、二学期以降も、パン工場などへ見学に行く予定である。

○「釜山」の時間

平成10年12月に告示された小・中学校の学習指導要領に、総合的な学習の時間が新設されたことから、今年度より「釜山」の時間を新設することになった。全校活動テーマを「国際理解」とし、小学部3・4年、5・6年部と中学部の三部制で行っている。

根本紀男（つくば市立二の宮小学校）

私が派遣されている国マレーシアについてですが、ほぼ赤道近くに位置する常夏の国です。朝から30度近くになり、4月に来た当初は我慢しきれず一日中エアコンをつけていました。しかし、住んでまだ半年足らずですが、たいへん住みやすい国だということがわかってきました。

例えば、この国の人たちは親切で、特に日本人に対して好意を持ってくれています。私たちが下手な英語で話しかけてもいやな顔をせず親切に対応してくれます。マレー、インド系、チャイニーズ、ヨーロッパ系、そして日本人とさまざまな人種が一つの国で生活しているのですが、お互いが尊重し合っとうまくやっています。食事の方も、日本とほとんど変わらない生活ができます。むしろ、中国料理あり、インド料理あり、タイ料理あり、もちろんマレー料理ありですので、日本よりバラエティーに富んでいるかもしれません。買い物も、近くにジャスコやそごう、伊勢丹があり、ちょっと高いですが日本のものはだいたい揃います。

次に、私の勤務するクアラルンプール日本人学校について簡単にご説明いたします。本校は、1966年に在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人学校として開校し、今年で34年目を迎えました。開校当時は児童数14名教員2名でスタートしたそうですが、現在では海外日本人学校の中でも有数の大規模校（幼稚部から中学部まで、園児・児童・生徒数が1,175名）となり、施設も年々拡充されて恵まれた教育環境が整っております。本校の特色は、外国人教師による英会話（小学1年生から）とコンピューター教育に力を注いでいる点です。

特に今年から3年間の計画で文部省の海外子女教育研究校の指定を受けて情報教育の実践研究が始まりました。現在は、デジタル回線で小中学校とともに約60台のコンピューターがインターネットに接続されております。子ども達は一人一人のメールアドレスを持ち、自由に校内やさらには日本の友達へメールを出し合っています。

今後、海外であるという特性を生かした国際教育や情報教育の成果を少しでもお知らせしていけたらと考えております。

花が咲く花が咲く

バハレーン日本人学校 会沢裕之

バハレーンでは、冬から春にかけては「生」の季節。学校の中庭にはたくさんの花が咲いています。

1年間の降水量が東京の約20分の1というバハレーン。それでも12月以降は2週間に1度は雨が降り、乾いた砂漠のバハレーンを潤してくれました。雨はこのかわいた大地に生命をよみがえらせ、近くの空き地を緑で埋めつくし、黄色の花を咲かせました。雨の降らない時期がまた続けば、自分の命が危ないことを知っているのでしょうか。あちこちで一斉にさき、風に揺られるその花たちは、そのかわいらしさには似合わず、生き急いでいるかのように感じました。

桜を見ることができないのは残念ですが、ハイビスカスも咲いて、学校中庭は南国ムードにあふれています。

砂漠のど真ん中でめずらしい植物を見つけました。その名も「デザート（砂漠の）ヒヤシンス」。雨水の流れた跡をたどっていくと、砂の間からひょっこり顔を出していました。緑の草原の中で植物を見つけても、感動はなかったかもしれません。広い砂漠の中にも乾燥に強い植物がぼつぼつ生えてはいますが、デザート・ヒヤシンスは、なかなか見つかりません。「今日はだめかなあ」とあきらめかけて帰ろうとしたとき、偶然にも見つけることができたのです。

デザート・ヒヤシンスも黄色い花も1年間ずっと雨が降るのを待ち続け、雨のあとのほんのわずかな期間に芽を出し、花を咲かせます。短い命です。しかし、その強さにくらべて、人間のなんと弱いことか・・・。

ある男の子がこのデザート・ヒヤシンスにぴったりの名前を付けました。その名も、「さばくの女王」！

北京滞在記

北京日本人学校 増田浩一

私が赴任した北京日本人学校は、北京市郊外に位置し、児童生徒数約400名の学校で

す。子どもまつり（現地の子どもを招待し日本文化を知ってもらおうお祭り）や各国の学校とのスポーツ大会など行事がたくさんあります。今年度から週休2日制、総合学習、イメージ（外国語を使って教科を教える）も始まりました。北京は文化や中華料理など大変奥が深く毎日楽しい発見があり充実した生活を送っています。今回は私が1年余りここ、北京に住んでとても印象に残ったことを報告します。

(1) 中国に来てとても怖いと思ったこと、また日本のすばらしさを実感したのは、環境問題（水・空気の汚れ）です。北京では素晴らしい青空が見える日が少なくなってきたそうです。それは1300万人以上の人口が1カ所に集中し、毎日400台ずつ車が増加しているからでしょうか。アジアの大都市はどれも同じような問題を抱えていることでしょうか。しかし中国の環境問題が他の都市と異なるのは、日本の環境問題（酸性雨など）に今後大きな影響を与えるような気がするからです。みなさん天気予報を見て下さい。中国大陸の雲は偏西風によって日本へ渡っていませんか・・・。

(2) 外国で生活するとその国を知るのはもちろんですが、それ以上に日本の良いことも悪いこともよく分かるようになる気がします。

例えばお米について。北京でお米を5kg買うと12元前後（約180円）です。味も日本とほとんど変わりません。同じ品物の値段が日本とこんなに違って、日本の農業は大丈夫なのでしょう。

また、インターネットの整備（携帯電話も含めて）について。北京でインターネットをしようとする1か月の電話回線料30元（約450円で固定制）とプロバイダー契約料の1時間4元（約60円）だけです。アメリカや各国が景気がいいのもこのインターネットによるところが大変大きいと聞きますが、日本以外の国々はインターネットや携帯電話に大変力を入れています。少しインフラが日本は遅れているような気がします。日本の産業は大丈夫なのでしょう。

今後とも日本と中国がますます発展（いろいろな意味で）しますように・・・

ウィーンの風

ウィーン日本人学校長 会川 忠雄

ウィーンは、天気ぐるぐると変わる。「一日の内に四季がある」という。そういえば昨夜の雷雨も尋常ではなかった。近くに落ちたらしく、停電してしまった。散歩コースのウィーンの森もいっそう生き生きと輝いているに違いない。

もう5ヶ月が過ぎてしまった。もっとこの都市のことを知らなくては・・・と図書室へ。人口約156万人、日本人は約1500人。市内をドナウ川が北西から南東へ袈裟がけに流れている。市内を大きく蛇行していたものを流れを変えたので三日月湖が残っていて市民の憩いの場となっている。湖畔には、色とりどりの水着姿で日光浴を楽しむ人、サイクリングをする親子、ローラーブレードで風を切って走る若者など様々だ。市内にはドナウ運河もある。のんびりと遊覧船がゆく。

旧市街は歴史の重みを感じさせられる。ステファン寺院へ通じるケルトナー通りは世界中の人々が散策している。どの建造物にも彫刻があり、建物の高さが一定している。地震がないのでレンガづくりで十分。30センチ角ぐらいの穴の開いたレンガを積んでいく。シェーンブルン宮殿、国立オペラ座、外から見ても中に入っても見応えがある。

学校は7年前に郊外に新築。本年は創立21周年目。派遣教員12名、現地採用時間講師6名、事務兼通訳1名。絶好調の景気に乗って完成した校舎は、よく整っていて広々とした芝生張りの校庭を完備。定員200名のところに現在は約3分の1の70名弱が通学していて、かなりゆとりがある。加えて、全国から選抜されてきた個性豊かな教員が経験を生かし、個に応じた教育を展開していて、理想的な環境である。

ドイツ語と英会話の授業を小学部から取り入れ、特色あるカリキュラムとしている。現地のフォルクスシューレ（小学校）との交流は年間計画にそって、どの学年も実施するようになっている。中学部はチロル地方への修学旅行があるが、この折りにも、現地校との交流がある。来年度からの「総合的な学習の時間」のテーマは「世界に目を開く」である。

校歌は「Vom grünen Wiener wald・・・(緑こきウィーンの森に・・・)」とドイツ語に訳されていて、子ども達に日々親しまれている。

1学期のビッグニュースは、宇宙飛行士向井千秋氏の学校訪問であった。国連宇宙会議に出席のため来喫された向井さんから約1時間講話を聞くことができた。終業式当日のことで、子供たちへの大きなプレゼントとなった。向井さんは、やや小柄で気さくな方である。子供達の輪の中に入って、記念写真に加わってくださった。

宙がえり 何度でもできる 無重力 (向井さんの上の句)
 風は吹かぬが 凧あげられる (本校生徒作品)
 天地が消える 宇宙空間 (本校生徒作品)

日本人学校での1学期を終えて

上海日本人学校 飯沼 幸則

中華人民共和国は、今年で建国50周年を迎えます。10月1日の国慶節には、様々なセレモニーが行われます。上海の町は、光沢民主席のお膝元とあって、新空港の建設、地下鉄の新設、高速道路の整備など、急ピッチで街の整備が行われております。

4月に赴任して、早々に上海空港の上空で、韓国の飛行機(貨物)の墜落事故がありました。5月には、NATO軍によるコソボの中国大使館誤爆事件があり、上海のアメリカ領事館前を学生がデモ行進。6月には記録的な雨で、大洪水。近くの動物園の動物が避難するほどでした。幸いに、ニュースで報道しているほど我々には影響がなく日本人学校の児童・生徒もふだんと変わらぬ生活を送ってきました。

上海日本人学校は、小中合わせて約630人が通っています。周辺の日本人学校が児童数が減少傾向にある中、上海日本人学校だけは児童数が増加傾向にあります。それだけ企業進出がめざましいのでしょう。教育活動では、国内の公立学校と違って語学学習が盛んです。中国語は1年生から週2時間、英会話は5年生から習います。どちらも現地の教員が担当しています。職員室は、英語と中国語と日本語そして地方の方言が飛び交います。パソコンを使ったコンピューター学習も1年生から取り組んでいます。来年には完全週5日制になる予定です。総合的な学習の研究も進めています。もちろん、国際理解、現地理解が研究の柱です。中国の文化に触れる学習活動が組まれています。

私は、小学校2年生の担任と中学校の社会を教えています。7月には、山梨大学教育学部附属小学校とインターネットを利用してテレビ会議を行いました。総合的な学習の一環で、「中国の果物について考えよう」というテーマで、日本との比較を行いました。附属小の3年生と日本人学校の2年生で、日本や中国でそれぞれ生活している中で、良いところを出し合うことができました。

1学期を終えて、中国語も少しずつですが分かるようになり、上海の生活にも慣れてきました。決められた期間で、実りある研修ができたと思っています。

シンガポール日本人学校 クレメンティ校

平成11年度派遣 徳永美保

4月からの4ヶ月は、正直な感想としては夢のように過ぎた4ヶ月間だった。4月8日、これからどんな生活が始まるのだろうと不安一杯で来星した日が嘘のようにも思える。

シンガポールに4ヶ月間住んでの感想は、海外生活をしているという実感がわいてこないということだ。それは顔つきのにている中華系の人が多いこと、学校が大規模校で一日の大半を日本人と共に過ごしていること、日本の生活とほとんど違いのない生活を送れることなどが原因なのだろう。とにかく何の違和感もなく生活を送れるシンガポールは、私にとって大変住みやすい国である。

シンガポール日本人学校クレメンティ校は、総合化の学習をメインに研修を積んでおり、今年の研究課題は「豊かな個性を身につけた子供の育成」ーシンガポール(総合科)を中心としたコミュニケーション能力の育成ーである。この能力を私達は、「交信する力」ととらえている。生活、学習の中でいかに子供達のコミュニケーション能力、交信する力を

高めていくかという研究が日々行われ、公開授業も盛んに行われている。授業公開後に行われる反省会では、いろいろな研修、実践を積んできた先生方が様々な角度から一つの授業や一つの課題について分析、提案をするので、とても勉強になる。

また本校の児童は、シンガポールの公用語である英語（英会話）の授業を週3時間受けている。この我が校の特色を生かして、総合科の授業の中でも積極的に児童が英語を使う場面をもうけ、英語でのコミュニケーション能力を高めることにも力を入れている。児童は、学校にいるローカルスタッフ、国際交流プログラムの中でローカル校の児童やスタッフとのコミュニケーションに、時には自分たちの学習課題達成のために英語を使う機会がたくさんある。英語（英会話）を使う目的・機会がとてもはっきりとしているので、児童も英語（英会話）の重要性を体験的に知ることができるのである。3年間が実り多きものになるため、研修を積んでいきたい。

環境教育実践について

パナマ日本人学校 石川聡

私の勤務しますパナマ日本人学校は豊かな自然に恵まれた学校です。校庭には椰子、マンゴー、パパイヤ、バナナの木が時期ごとに実をつけ、また、一年中花が絶えることなく咲いています。このような豊かな自然環境を背景に本校では、『「共存・共生」をめざす子どもの育成～「水や熱帯雨林」を扱った横断的・総合的な環境教育を通して～』の文部省指定研究に取り組んでいます。

今回、私も提案という形で授業をさせていただきました。以下、実践についてお話ししたいと思います。

環境教育といいますが、特設の時間をもうけず、各教科を軸に長いスパンで学習する方法で行いました。私は今回の授業で次の3点を重視し計画を行いました。

- ①児童の実態に合わせた活動の構成
- ②体験学習の重視
- ③評価の工夫

特に②の体験学習の重視では、全校で年に30回以上の校外学習をします。私の担任する3年生は1学期で10回を超える校外学習を行いました。国立公園や地域の公園、またレクリエーション施設の整った都市型公園など、様々な公園で活動することで周囲の自然に触れ、考え、活動し学ぶ機会を設けました。国立公園でモルフォ蝶を追いかけた体験は今後環境について学習する際に大きな原動力になると思います。

これからも研究は続きますが、この特別な環境、社会、文化を生かしパナマならではの学習を数多く行っていききたいと思います。

ホーチミン日本人学校に赴任して

ホーチミン日本人学校 皆川正巳

ベトナム・ホーチミン日本人学校は、平成9年度開校された新しい学校です。私は、開校とともにこちらに赴任してきました。初めての海外生活それも社会主義国、開校、教務主任ということで、多少戸惑いもありましたが、何とか軌道に乗せることができました。

2002年から導入される総合的な学習を取り入れ、現地理解教育を初年度より始めました。まず、現地校との交流の実現をめざしてきましたが、社会主義国のため、そのたびに書類を国に提出しなければならず大変でした。それに加えて、ホーチミン日本人学校は歴史のない学校なので、許可がおりず平成9年度、10年度の現地校との交流学习は諦めなければなりません。そこで、ベトナムの文化を学ぶということで、衣食住について学習しました。伝統的な食べ物、工芸品について調べ、実際に作成したりすることにより、子供たちは、ベトナムについての理解を深めることができました。今年度から、しつこく申請していた現地校との交流学习も認められ、1回目の交流会が1学期に実施されました。各学期1回ずつの交流学习を予定しております。

子供たちも保護者も、ベトナム人に対しては汚い、貧しい等の偏見を持っており、とか

くそれが全面に出がちです。ですが、この総合的な学習を展開してきて、ベトナム人のすばらしい面を発見することができるようになりました。

平成9年4月に赴任したころと比べると、本当に物も増え、街は発展しています。新しい物をどんどん吸収し、大きく膨れ上がっている感じです。日本での1年が、ホーチミンでは1ヶ月といった勢いでしょうか。しかし、それに伴い、排気ガスによる大気汚染、治安の悪化も進んでいます。車に乗っていてもあまりのバイクの数とその排気ガスにより気分が悪くなるほどです。スリやひったくりは日常茶飯事、先日は目の前で発砲事件があり、ひやっとさせられました。しかし、私は、このパワー溢れる街が好きです。

開校して2年と5ヶ月。ホーチミン日本人学校が育ってきたように、私も一緒に成長することができたような気がします。残り少ない在任期間、悔いの無いように過ごしたいと思っております。

「学校」って？

チューリッヒ日本人学校 浅野嘉宏

スイスの学校について書きたいと思います。

ここでは連邦（国）が「子供には9年間の義務教育を受けさせる。」という決まりしかありません。ですからこれをふまえて各カントン（日本でいう都道府県）が独自に考え、それを各ゲマインデ（市町村）に下ろします。かといって、日本のように文部省→都道府県教育委員会→市町村教育委員会→各学校というようなピラミッド型の縦の図式は成立していません。というのは、スイスでは日本のように上の図式にあるような上で決まったことを画一的にそのまま教えるのではなく、最終的に各教師の感性、興味、関心、独創性、独自性に任せることが多いからです。

例えば、ある教師は社会科で1年間インディアンについて調べさせたり、歴史では自分の興味のある時代、国の歴史についてのみ調べさせたりします。本当にその年の担当教師によって違うようです。

また、小学校の5、6年生で自分の進路が決まってしまう。こちらの学校は小学校を卒業すると、自分の能力、適正に合わせて進路を決めます。中学校もこのようなことからギムナジウム（大学進学をめざす中高一貫教育）、セクンダージュレ（ギムナジウム進学と高度な職業に就く）、リアルシュレ（手工業を中心とする職業訓練をめざす）、オーバーシュレ（日常生活を円滑に送れるような基礎知識を身につける）という学校に分かれています。ギムナジウムは日本にたとえればいわゆる一流高校と同じようなものですが、こちらでは日本のようなエリート意識はほとんどありません。なぜかという、どんな学校でも、「学校は将来仕事をするための技術（知識）を身につけるための一過程にしか過ぎない。」という意識があるからです。つまり最終目的は「仕事」なのです。その分野でどれだけのプロフェッショナルになれるか、いかに自分を磨き、成長させ、他の人からどれだけの信頼を得るかなのです。

私の知り合いのスイス人の娘さんは、現在チューリッヒ大学医学部の3年生です。ある時彼女が担当教授に「勉強が大変だ。」とこぼしたそうです。その教授は彼女に対しささずこういったそうです。「嫌だと思えば大学を辞めればいい。どうしても医者になりたいければ、大変でも続けることだ。なぜなら、医者になろうと決めたのはあなた自身なのだから。」

アラビアの「滴」カタールより

ドーハ日本人学校 教諭 鈴木公明

現在私はアラビア半島にあるカタール国ドーハ日本人学校に勤務しております。

カタールとは「滴」を意味するアラビア語で、人口は約60万人、面積は秋田県とほぼ同じです。国土の大部分は土漠といわれる荒野ですが、南部には白砂の砂丘地帯が広がっています。4月から10月までは気温が40度を超えるため、屋外での活動はほとんどできません。（因みに今年の最高気温は49.7℃でした。）

この国の主な産業は石油ですが、近年は世界有数の天然ガス田の開発も順調に進められ、日本への輸出も行われているなど、経済的には日本と密接な関係があります。

また、カタールはイスラム諸国の中でも厳しく戒律を守っている国です。1日に5回のお祈りがあり、多くの人がモスク（寺院）に通っています。

学校はJ B Kとよばれるコンパウンド（居住区）の中にあります。全校児童生徒数が15名と本当に小さい学校です。学校の特色としては、次のような取り組みがあげられます。

①国際理解教育

児童・生徒の体験をいっそう充実させるために、現地理解学習を行っています。昨年度は、LNG船の見学や製鉄所の見学等を行いました。また、カタール人学校やノルウェー人学校との交流学习等も行いました。

②情報教育

ホームページを開設し、カタールから世界に向けて情報を発信しています。日本や他の国々とも交信を行い、交流を図っています。

③外国語学習

国際理解教育の一環として、イギリス人講師による英会話の授業を実施しています。また、シリア人講師によるアラビア語の授業も行っています。

このように、自然環境も生活環境も日本とはまったく異なる地での暮らしですが、子ども達はとても元気です。

赴任1年目は家族共々現地の生活になれることで精一杯。2年目によりやくいろいろなことが見えるようになってきて、3年目はもう帰国になってしまいます。日本を離れての生活は失敗もありましたが、すばらしい体験でした。このような機会を与えてくださった方々に感謝申し上げます。今は残された期間を有意義に過ごしていきたいと思っています。

シンガポール日本人学校事情

シンガポール日本人学校クレメンティ校 鈴木 隆

日本を南西にはるか離れた、ここシンガポールでは、赤道から約1300kmということもあって、毎日が30度を超す真夏日です。学校でも当然毎日どこかの学年がプールの授業を行っています。子どもたちは大半が、居住するコンドミニウムから同じ地区ごとに集まり、スクールバスで通っています。極少数ですが路線バスを使って通学する子もいます。

この国では、車の値段が高い（自家用車は日本の3倍程度、しかも中古）代わりに、公共交通機関が発達しており、国内のどこにいても、15～20分間隔で来る路線バスや、MRTと呼ばれる電車で移動することができます。また、タクシーが日本とは比較にならない位の数と料金の安さで走っており、大変重宝します。

さて、学校ではイマージョン教育と称して、低学年の児童の音楽の一部を英語で実施している他、1～6年生までをレベルごとに分けて「英会話」の授業を行っています。また、学校交流事業として地元の学校との交流を各学年で推進し、毎年華やかな催しとなっています。新設された総合化の授業と関連させ、授業研究も盛んに行っています。つまり大変慌ただしく忙しい毎日です。

世界一の規模を誇るシンガポール日本人学校も10年度に小学部がクレメンティとチャングに完全分離し、中学部とあわせて3校で邦人子女の教育を行っています。また、各校にいる障害児に配慮し、「養護教育」（関西系の呼称、関東でいう特殊教育、障害児教育のこと）の担当者を置き、在籍は普通学級のまま各主要教科の指導や技能教科での付き添い指導を実施しています。

日本人学校は、その国によって設置母体が異なると思われませんが、我が校は、シンガポール日本人会が設置運営しており、いわゆる私立学校となります。そのため、専務理事である事務局長の権限は大きく、学校の管理職も大変気を使っています。反面、日本では経験できない環境や人的な条件に支えられ、教師として大きく目を開くことのできた点もあります。英会話の授業には、欧米人を含むローカルスタッフがいるのでそういう人たちと日常気軽に付き合えること。日本人教員は国内各地から集まってきた人たちであるので、

教員相互の国内交流ができること。この2点を日本人学校の特長としてあげたいと考えます。世界は広い。後に続く人たちを信じつつ報告とさせていただきます。

ブダペスト日本人補習校 園部 文夫

ハンガリーでは、日本（ヤパンという）の名は車や電気製品を通してよく聞かすが、日本ではハンガリーはまだ未知な国であるに違いない。

ハンガリーは東欧の旧社会主義国の一つで、自由化になって今年で10年である。面積は北海道より少し大きいくらい、緯度は樺太と同程度の小さな内陸国である。人口は1000万人強、国のほとんどは平原で、国土の中央をドナウ川が縦断している。

歴史をひもとけば、古くはローマ帝国、トルコ、そしてオーストリア帝国、ナチスドイツ、ソ連、と次々に他民族の支配下にされながらもマジヤール語という独自の言語と文化を守り続けてきた国である。マジヤール民族は、ヨーロッパでは珍しくアジア系の民族であり、その言語は英語やドイツ語、フランス語などとはかけ離れている。むしろ、名詞の後に助詞が付くことや主語を省略するところなど、日本語と似ている部分もある。

現在ハンガリー在住の日本人は約600人。スズキやデンソー、TDK、ソニーなど日本から工場進出している企業もあるし、駐在員を派遣している企業も多い。また、音楽関係で留学している若い学生も多い上、逆に日本語を学ぶハンガリー人が多いのにも驚かされる。日本の経済大国ぶりは、ハンガリーにいてより実感されるといってもよい。そして今、経済が自由化になってしばらくたつこの国では高度経済成長のまっただ中にあるごとく、建設ブームであり、ものの種類が増え、サービスが改善され、日に日に変貌を遂げている。インフレ率が高く、貧富の差が開きつつあるにもかかわらず、人々は将来に希望を持っているかのように明るく、働き、そして生活を楽しんでいるといった印象である。私たちが赴任した3年前はまだ生活上で不便なこともあったが、今はほとんど日本と変わらないと言える。

さて、そのハンガリーで唯一の日本人補習校は首都ブダペストにある。現在児童生徒は52名、教職員が5名。補習校でありながら、児童が週2日ずつ通う準全日制である。児童生徒（小学生、中学生）は、アメリカンスクールやハンガリーに公立学校に通いながら、週2日放課後にこの補習校に来て日本語の授業を受けるのである。小さい子どもにとって肉体的な負担は大きい、日本語の保持という面からはとても重要な役割を果たしている。というのも、ビデオ、雑誌、テレビ、書籍、どれも、日本語のものを見ようと思っても簡単にはいかない。日本語を話す友だちがすぐ近くにいていつでも会えるというのでもない。つまり、日本語は家庭でだけということになるのだが、使う機会が限られているので語彙は増えないし、慣用語や漢字は忘れるし、大人でさえ次第に怪しくなるのだから、ましてや子どもは言わずもがななのである。それを補い、いつ日本に戻っても適応できるようにするのが補習校の役割と考えている。しかし子どもたちにとっては意外にも、母国語で苦勞なく話せる補習校の存在が生活上大きな支えになっているようなのである。そのため、補習校では文化祭や合宿や遠足など多彩な行事をもうけて、各学年間の交流を図るとともに、専用図書室の整備、個人面談など、側面から児童を支援する体制も整えている。補習校の児童たちは、人数が少ないせいもあるのか、学年を越えて仲がよく、上級生が下級生の面倒をよく見ているのが自慢である。

授業は1日3時間、国語と算数を中心に行っている。ただ、現地校が夏休みに入る6月後半から7月には集中授業と称し、日本の学校と同じように他の教科も行う。

教師たちの悩みは、少ない時間数でいかに効率よく教科書の内容を教えるかということ、日本語能力の個人差にどのように対応するかということ、である。バイリンガルならずどもできないセミリンガルが問題とされている今、1時間の授業もおろそかにできないと気をひきしめている毎日である。

マドリッド雑感

マドリッド日本人学校 小 吹 孝 雄

平成11年4月8日 スペイン マドリッド（こちらではdは発音しない。） バラハス空

港に到着しました。在籍校の府中中学校はその年文部省進路指導の研究推進校に選ばれていて全職員が大変忙しい生活をしていました。私も例外に漏れず、大変忙しく赴任校がマドリッと知らされてからもまったくスペインのことを知らずにスペインの地に着いた感じでした。

まず驚いたことは、夜9時を回っているというのに太陽が出ていることでした。夏至では11時を回っても明るいという、嬉しいというか悲しいという現象でした。学校が終わってからももう一勝負できるという感じであり、実際に週3日ほどスペイン語の家庭教師をつけてスペイン語を猛特訓しています。受験勉強を思わせるほどですが、即役に立つ学習であるので、やり甲斐があり充実しています。本校でも総合的な時間が論議されていますが、個人的には生きる力を育む学習を考える一助となっています。もちろんそれだけではないのは皆さんもご存じの通りですが。

次に嬉しいことはスペイン人です。我が家は3歳と1歳の男の子がいるのですが、元気がいいです。よく日本では迷惑だなと思うほどの活動派です。しかし、スペイン人は子どもを大変可愛がってくれます。近くの路上でも見知らぬ人が子どもに「オラ、コモセジャマ」（こんにちはお名前は）と言って、近づいてきて遊んでくれたり、私たちとも進んで会話を楽しくしてくれます。ちょっと遠いですが、子どもを連れてきてガイドブックにない旅行をしたかったらスペインはお勧めです。ただし、英語がほとんど通じませんのであしからず。スペインはここ最近まで鎖国をしていたので、国民の多くが世界情報をあまり知らなかったこともあり、日本についての知名度は低いですが、ここ近年日本びいきの人が増えています。本校でも、スペイン人を対象に剣道教室や派遣教員婦人のボランティアによる書道教室が開かれており、年々参加者が増えています。

まだマドリッにきて4ヶ月しか経っていませんが、日本では味わえない皆さんの経験を宝として茨城に戻り、国際理解教育の一助となるよう今後も努力していきたいと思しますので、今後ともご援助の程よろしくお願いします。

あ と が き

初めての広報誌の編集ということで、細野会長から発行の依頼があったときは、だいぶとまどいました。しかし、諸先生方のご指導とご協力のもと、何とか発行にこぎつけることができてほっとしています。

今回の広報誌には、会長の細野先生を始め、海外の先生方や帰国された先生方からもたくさん原稿をいただきました。お忙しい中、原稿をいただきまして、どうもありがとうございました。この場を借りましてお礼を申し上げます。

在外教育施設へ赴任されている先生方への原稿依頼には、Eメールを使いました。ほとんどの在外教育施設でホームページが開設されており、とても助かりました。全世界が情報のネットワークで緊密に結ばれているということを、肌で感じることができました。私が海外の日本人学校へ派遣されていたときは、隔世の感があります。また、たくさんの先生方から貴重な写真を送っていただきましたが、諸般の事情により掲載を見送りました。何らかの対策が必要ではないかと感じました。

今後も「茨城県海外子女教育・国際理解教育研究会広報誌」をよりよいものにしていきたいと感じますので、広報誌に関するご意見がございましたら、広報・研修担当役員まで遠慮なくご連絡ください。（文責 河嶋）